

北タイ、ナーン県における開発と文化の再編

- メコン開発とタイ民主化のはざま -

馬場雄司*

Regional Development and Cultural Reformation in Nan province, Northern Thailand:

As Development of the Mekhong Region and as Democratization in Thailand

Yuji BABA *

Abstract

The recent regional development and cultural reformation of Nan province is characterized by the following 2 points. 1) As a part of the transnational development program between Yunnan, Laos and Nan, 2) As one of the models of democratization in local area in Thailand. To examine these points, this paper focuses on the case of Pakha-subdistrict in Thawanpa-district.

In 1990's the villages of Phaka-subdistrict began to seek their own history and culture, and to display their culture to outsiders in the context of the movement of cultural reformation in whole country. Phaka-subdistrict consists of several Tai groups who migrated as captives from several places in the middle reaches area of the Mekhong river in the 19th century. After the Cold War, some of them began to contact their home places across the border. To understand their cultural reformation, it should be examined it in the context of their historical background.

In Thawanpha-district a few key persons play important roles in several organizations for rural development including cultural reformation. They are mostly found in Phaka-subdistrict. The democratization of local areas in Thailand is based on the human networks between the public and private sectors. However it has a limitation that its sustainability depends on the key persons in the human networks.

はじめに

1988年にタイに成立したチャーチャーイ政権は、「インドシナを戦場から市場へ」というスローガンを掲げ、89年に「戦略的県開発計画」を策定し、インドシナ開発とタイの国内地方開発のリンクを目指した。ここには、1980年代後半からの東西冷戦終焉

への動きを契機とした、ソ連、中国をはじめとする東側諸国の改革が、1975年に社会主義革命を遂げたインドシナ3国に影響を及ぼしたという背景がある(笠井1997:30)。

また、タイでは、とりわけ1992年の民主化闘争以来、急速に民主化が進んだ。それは、例えば、1994年の区(タンボン)の自治体化など¹⁾、地方分権・地方自治の進展に

* 三重県立看護大学・助教授

みられる。この点は、1997年に制定された新憲法においてもとりあげられた重要な点である（橋本 1999ab）。新憲法では、地方文化重視による文化行政の分権化の方向が打ち出され、県・郡文化評議会の活動が活発化し、地域の文化を教育にとりいれる動きもでてきている。

タイでは、とりわけ80年代の経済成長以降、社会変化も著しく、伝統文化の見直しによって地域作りを行おうという方向も打ち出されてきた。国家文化委員会や識者は、80年代以降の伝統的な家族の絆の崩壊や、メディアを通じた異国文化の無制限な流入などを指摘し、「古くからの地域の知恵」の重要性を唱えてきたのである（チャカロット・チッタラポン 1999：93-94）。民主化に伴う文化の見直しの動きは、こうした流れの上にある。

筆者は、以上のような近年のタイにおける地域開発の流れを踏まえ、北タイのナーン県の開発と文化の再編の問題を考えてきた。具体的には、主としてターワンパー郡のタイ・ルー村落の儀礼の変化を地域開発との関わりで記述・考察してきたが、地域開発と文化の再編の問題に関わる重要な要素として「住民組織のネットワーク」にも注目してきた（馬場 1995, 1998ab, 1999, 2001）（Baba 1999）²⁾。

分権化政策の一つとして、第8次経済・社会開発計画（1997）において政府が奨励したのは、地域社会、研究者、NGO、行政関係者、企業家など様々な分野で活動する者が協力して作る県レベルでの共同体（Prachakhom Radap Canwat [Provincial Community]）である。ナーン県ではプラチャーコム・ナーンが設立され、ナーン県全

体の住民組織のネットワーク化に大きな役割を果たしている。ナーン県では、元来、「クルム・ハック・ムアンナーン」と呼ばれる、僧侶を中心としたNGOによる住民組織のネットワークがあり、プラチャーコム・ナーンはそうした経験がベースになっている（Prachakhom Nan 1997）³⁾。

このようなネットワークの成功は、国内でも注目されることとなり、マヒドン大学の人口・社会研究所のオラタイ氏とクソン氏は、タイ的なオルタナティブな民主化のモデルと位置づけている。住民組織、地域の指導者、ネットワークのセンターなどの調査を行い、多くの社会資源を利用し、コミュニティの自己管理ができる潜在能力を持つ点を評価している（Orathai&Kusol 1998：38-42）。また、マヒドン大学医学部のプラウエート氏は、タイ民主化のオピニオン・リーダーの一人として知られるが、同氏は、しばしば、「クルム・ハック・ムアンナーン」を訪れ講演も行っている。

こうしたネットワークの成功とそれに対する賞賛は、近年、タイにおけるオルタナティブな開発の理論として影響力をもってきた「共同体文化論」との関わりを想起させる。「共同体文化論」とは、チュラローンコーン大学経済学部のチャティップ氏やプラウエート氏らを始めとする識者に代表される論であるが（チャティップ 1992）（Prawet 1991）北原が要約しているように、とりわけNGOによる民衆参加型村落開発において、「民衆が国家・市場から自立するためには、伝統的共同体文化に立ちかえる必要がある。そうして自己や地域のアイデンティティーを取り戻し、生活の解決能力という潜在能力を発見し自立が可能となる。

優れた資質を持つ民衆の識者が民衆の知恵を模範的に示し、民衆が従う」というように理解されて運用されてきた（北原 1996：101）。

プラチャーコム・ナーンが仏教NGOの住民組織ネットワークをベースにし、識者が民衆の潜在能力に期待する様は、共同体文化論の延長にあるようにも思われる。ただ、ここでいうプラチャーコムとは、政府の奨励する官・民・企業など様々な機関のネットワークであり、共同体文化論でいうような国家・市場から独立した民衆の共同体ではない。これは、90年代、分権化に向かった政府の農村開発政策がNGO村落開発運動と協力し、国家文化委員会も「民衆の知恵」に注目するという（北原1996：120-124，128）国家自体の民主化の流れの中で、地域のアイデンティティーをいかに国家・市場との連携の上で確立するかを目標とするものである。「地域文化の見直し」は、こうした流れの上にある。

このようにナーン県の開発は、民主的な開発のモデルとされ、文化の再編もそうした動きの中で行われているが、今一つ、別の重要な側面がある。それは、国境を越えた開発の動きとの関連である。

80年代後半からの、インドシナ開発とタイの国内地方開発のリンクは、メコン中流域の「黄金の四角地帯」という言葉で代表される開発計画にも窺うことができる。ミャンマー、タイ、ラオス三国国境地帯は、かつて「黄金の三角地帯」と呼ばれ、麻薬の生産地として名を馳せたが、この地を中国を含めた四か国によって共同開発を進めようというわけである。この地域全体に関わる計画の主なものとしては、四か国国境

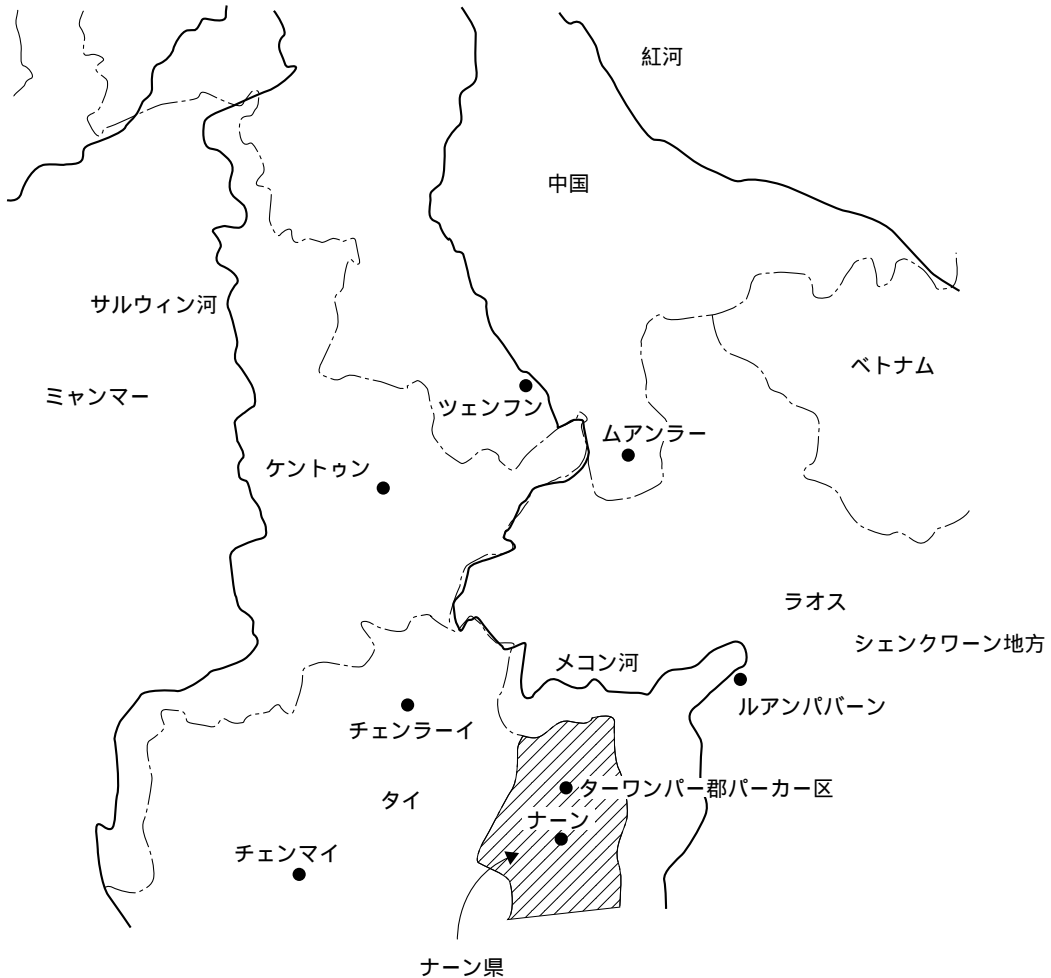
地帯をめぐる環状道路の建設、メコン川の交通利用などがあり、現在、部分的に実現されている。また、この地域内の部分部分での地域間協力も進められている。

北部タイでは、とりわけ、チェンラーイ、チェンマイがこの計画の中心地となっているが、本稿で扱うナーン県でも、ナーン - ラオス北部 - 雲南の3地域間協力が1995年に策定され、徐々に計画が実行されつつある。しかしながら、ナーン県は、こうした計画の一翼にありながら、チェンマイ、チェンラーイとは異なった、開発と地域作りを模索している。

1994年にチェンラーイで、タイ、ラオス、ミャンマー、中国国境地帯の5つの都市の歴史・文化の共通性を考えるセミナーが開かれた。その際、チェンマイ大学のタネート氏が、黄金の四角地帯構想による経済開発が進む中、この地域が歴史的文化的に共通の基盤をもつことに目をむけ、自然環境・文化遺産を守ることの必要性を説いている。チェンラーイ県では、メコン川を利用して雲南のツェンフン（景洪）やラオスのルアンパバーンと結ぶ航路が開通し、チェンマイ - ツェンフン及びチェンマイ - ルアンパバーンを結ぶ航空路も開通しているが、ナーン県では、このような目に見えて活発な動きはみられない。本文で述べるように、むしろ、タネート氏のいう自然環境・文化遺産を守ることを重視しつつ国境を越えた開発を望む方向を考えている。

以上のように、ナーン県の開発と文化の再編の問題は、文化行政の地方分権化による地域の見なおし、国境を越えた開発への動きの中での文化保護という課題と関わっている。従来、ナーンの地域開発の問題に

図1 メコン中流域



関わる研究は、民主化のモデルケースとしての側面を主としてとりあげており、国境を越えた動きを含めて考察した研究はみられない⁴⁾。本稿では、とりわけ、筆者が1990年以來、調査研究に携ってきた、ターワンパー郡パーカー区の事例をとりあげるが、それは、以下のような意味をもっている。パーカー区は、様々なタイ系民族からなる。これらのタイ系民族は、現在もメコン川中流域に国境を越えて分布するもので、19世紀に、戦乱などによって一部がこの地に移

住したのである。近年は、この多様な文化を見直しアピールすることで地域文化の再編を行おうとし、同時に自らの出身地域とのネットワーク形成を試みる動きもある。またこの地区は、民主化の時代における農村開発のモデル地区として知られてもいる。パーカー区には、開発と文化の再編の問題に関して、国境を越えた動きとタイ国の民主化の動きの両側面が凝縮されていると考えられる。

本稿では、パーカー区の事例の検討を通

じて、モデルになる地区の特色やモデルとなる条件を具体的に示し、ナーン県の開発と文化の再編のもつ特色を考える手がかりとしたい。

・ ナーン県の開発と文化の再編 - 概況

前述のように、ナーン県の開発は、メコン中流域開発の一環として、またタイにおける地方の民主化のモデルとして位置付けられる。ここでは、この二つの側面からナーン県の文化の再編の問題を概観してみたい。

1. 「黄金の四角地帯」構想とナーン県における文化の再編

メコン川中流域には、13世紀以降、前近代を通じて、チェンマイ（現在、タイ北部）を中心とするランナー王国、ツェンフン（現在中国雲南省西双版纳タイ族自治州景洪）を中心とするシブソーンパンナー王国、ケントウン（現在ミャンマー・シャン州）のケントウン王国、ルアンパバーン（現在ラオス北部）を中心とするランサーン王国などタイ系諸王国があり、共通の仏教文化とそれに伴って流入した文字の共通性を始めとして⁵⁾、共通の文化をもち、歴史的にも、相互に深いつながりをもっていた。

ナーン県は、タイ北部に位置し、北辺と東辺でラオスと接する地域である。そして、かつては、ナーン王国の領域であった。ナーン王国は、長きにわたってチェンマイのランナー王国の1領域となり、ルアンパバーンのランサーン王国とも交流をしていた。ナーン県は、このように、チェンマイとルアンパバーンをつなぐ地域として特異な位置にあった。しかしながら、19世紀にフラ

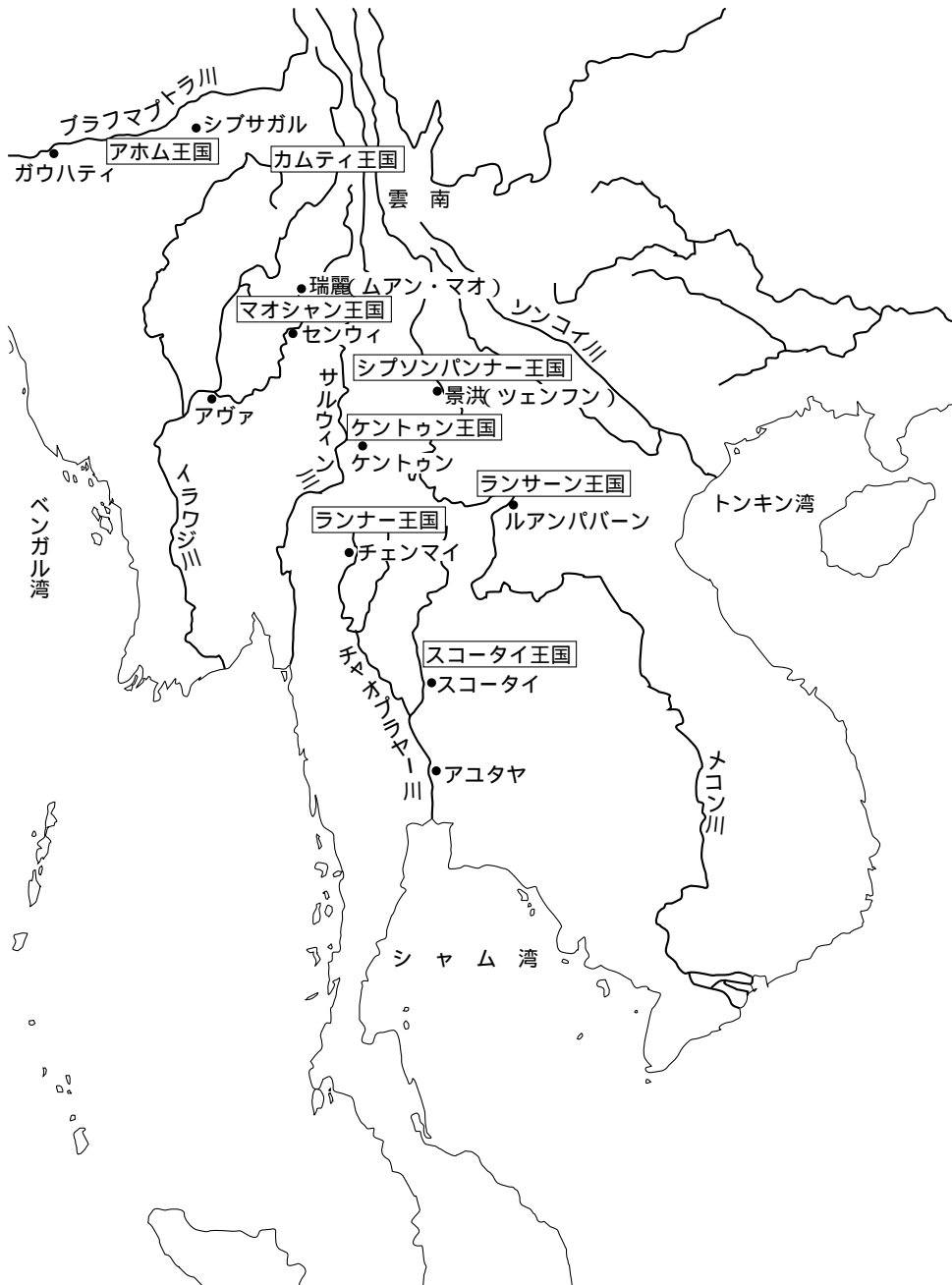
ンスによるラオス植民地化によってナーンとルアンパバーンの間に国境が確定され、ラオス独立後も冷戦時代に入って国境は閉ざされた。そして、冷戦後、再び、国境を越えた交流が行われるようになった。「黄金の四角地帯」構想である。

以上の歴史背景を踏まえ、ナーン県の「黄金の四角地帯」の一翼を担う地域としての側面をみてみたい。表立って構想の一翼を担うと思われるのは、ナーン - ルアンパバーン（北ラオス） - シブソーンパンナー（中国雲南省西双版纳タイ族自治州）を結ぶルートの開発である。これはトライパーキー（3地域間協力）と呼ばれ、1995年より、ナーン県商工会議所が中心となって検討されてきた（Hokankha Cangwat Nan 1995）。

こうした一環として、4月のソクラーン祭（水掛け祭り）の際にナーンとシブソーンパンナー双方が訪問し合ったり、3地域対抗のボートレースが行なわれたりしている。シブソーンパンナーの主要民族は、タイ系民族の一つタイ・ルーであるが、ナーン県には19世紀の戦乱の際に、シブソーンパンナーから移住したタイ・ルーが多く居住する。このような背景もあり、西双版纳タイ族自治州の州長をはじめとする要職者がナーン県に居住するタイ・ルーの村を訪れてもいる。

しかしながら、多くの計画があるものの、現実にはあまり進展していない。1994年に、ナーン県 - サイニャブリー県（ラオス） - ルアンパバーンを結ぶ陸路が開通し、バック旅行も行われているが、現在はタイ人のみに許されている。近々第三国観光客にも開放されるとのことで、ナーン市にラオス領事館が開設されるというのが予定のままであ

図2 タイ系諸王国分布図



出所 馬場雄司、長谷川清．1994．「アジアに広がるタイ族」『暮らしがわかるアジア読本 - タイ』（小野沢正喜編）．河出書房新社：224（若干の修正を加えてある）

る。2001年には、ナーン - ルアンパバーンを結ぶラオス航空の路線が開通したが、乗客数が満たず、キャンセルが多い。また、地元建設会社の協力による国境を超えての道路建設も開始されたばかりで、ラオス・サイニャブリー県のホンサーからタイ・ランパーン県メモへの電力輸送計画もあるが、計画段階である。サイニャブリー県のうち、ナーン県北境に位置するホンサー郡、ムアングン郡、シエンホン郡、ムアンコーブ郡は、ムアングンの町を除いて舗装道路が整備されず、電力の供給もなされていない⁶⁾。これは、タイ - ラオス政府間で開発の進め方に関して合意が得られていないのが原因というが、詳細は不明である⁷⁾。

このように、国境を越した開発に関しては、計画通りには進んでいない現状であるが、ナーン県内の観光は国立公園のキャンプ場整備など、徐々に進んでおり、ホームステイの計画を進める村もある。ただ、ナーン県は、1980年ごろまで「共産ゲリラ」の拠点となって、観光開発が遅れていたこともあり、先に観光化の進んだチェンラーイ県とは異なる道を摸索しているようである。観光開発の関係者によれば、「チェンラーイのように、むやみにトレッキングツアーをさせて野放しに外部者を入れることに対する躊躇」だという。実際、県は、「環境保護」「住民の福祉」を重視した開発を考えているといい、観光スポットには食堂を作らない条例を作り、古跡や自然に親しむことを目的とした観光 - エコ・ツアーを中心とした観光を考えているという。別の見方をすれば、チェンラーイよりもはるかに開発が遅れ、また、ラオス側のサイニャブリー県が未開発な現状では、そういう方向へ進ま

ざるを得ないというようにも考えられる。

現在、ナーン市を市ぐるみで世界遺産に登録する計画が進められている。名所旧跡のみならず、地域の生活の中の知恵など、住民の生活そのものも含めて、世界遺産にしようという試みである。これは、先に、町ぐるみ世界遺産となったラオスのルアンパバーンを意識していると思われるが、こうした計画によって、住民の生活を守りつつ、国境を越えた開発を進めるという方向へと動き始めている。

2. 民主化と文化の再編

民主化の流れの一つとして、文化行政の地方分権化がある。ここでは、この流れの中で文化の再編に役割を果たす、3つの組織をとりあげたい。

一つは、現在、国家文化委員会統括下にある県文化評議会である。これは各県に存在するが、ナーン県では、ほぼ各郡に文化評議会が設けられ、伝統文化保存・振興が図られている。ナーン県は、主として平地で水稻耕作を営むタイ系の民族（タイ・ユアン、タイ・ルーなど）と主として山地で焼畑耕作を営む民族（ヤオ[ミエン]、モン、ルワ、カム、ティンなど）からなる多民族社会である⁸⁾。各郡文化評議会は、これらの民族文化の調査・保存を図るとともに、ソクラーン祭など大きな行事の際に、各民族の音楽・踊りなどを披露し、文化の振興を図っている。

前述のように、国家文化委員会は、「古くから伝えられた地域の知恵」=「民衆の知恵」に注目しているが、こうした方面での役割を期待されるものとして、「高齢者クラブ」(チョムロム・プー・スーン・アーユ)

がある。これは、全国高齢者協議会の統括下にあるもので、各県支部のもと、現在、村レベルまで浸透しつつある。協議会は、1989年の設立の後、1991年に故王母がスポンサーとなり、厚生省の支援も得ようになっている。「高齢者クラブ」は、タイ人の高齢化に伴って作られたもので、「高齢者」の健康維持を目的の一つとしているが、「文化の伝承」「地域への貢献」もその役割となっている（Samakhom Phusung Ayu Nan 1998）。ナーン県はまたこの「高齢者クラブ」の活動が活発なことで知られている。

「文化評議会」「高齢者クラブ」は、ナーン県の、プラチャーコム・ナーンとネットワークを結んでいる。

前述のように、タイ政府が、第8次経済・社会開発計画において、県レベルでの共同体を作り上げるよう奨励した。ナーン県ではプラチャーコム・ナーンと命名された組織が形成され、ナーン県全体の住民組織のネットワーク化に大きな役割を果たしており、この成功は全国的に注目されている。

プラチャーコム・ナーンがネットワーク化を進めつつある県内の諸組織は、環境保護、伝統文化保存、農村開発、住民のQOL（生活の質）向上などの諸分野に及んでいる。伝統文化保存に関しては、民俗芸能、草木染めなどの伝統工芸、薬草の知識、民間儀礼など様々な分野にわたるが、これらは、クルム・ハック・ムアンナーンが、自然環境の保護・回復という課題と絡め、「地域の知恵＝民衆の知恵」に基づいて進めてきた活動が基礎となっているという。（Prachakohm Nan 1997）

プラチャーコム・ナーンの要人によれば、ナーン県でこうしたネットワークが成功し

た理由として、大企業もなく、有名な教授も存在せず、特定の権益をもつ大きな団体もないことをあげている。例えば、チェンマイ、チェンラーイでは、有名大学もあり、大企業、華人団体、雲南系中国人の会館など、多くの団体が林立し、連携が取りにくい状況にあるが、ナーン県には、そのような力のある団体がいないことがかえって幸いしたと考えているのである。また、開発が遅れたことで、豊かな自然、伝統的な生活が比較的残っており、そうした伝統的な相互扶助のあり方をうまく利用できるということがナーン県の潜在能力であるという。平均月収は、全国でも下位にランクづけられるが、「乞食というものが殆どいない」ということも彼らがよく特徴としてあげる点である⁹⁾。

北原は、「民衆の知恵」は民衆の識者が模範的に示すものであるが、「民衆の知恵」の模範事例は、商品経済の浸透の比較的弱い村落においてみることができ、政治的・宗教的・人格的要素を備えた「知恵者」が村落統合を個人の利益に優先させることができると述べている（北原 1996：120-121）。また、上記のプラチャーコム・ナーンの要人の談話での「伝統的な相互扶助を利用できることが潜在能力」というくだりは、「共同体文化論」とも通じるところである。プラチャーコム・ナーンは国家・市場との連携を念頭においた「共同体」ではあるが、開発の遅れ、企業を含めた大きな勢力のない点が、却って、現在の共同体文化志向の開発のモデルとなりやすい条件となったと考えられる¹⁰⁾。

以上、ナーン県の開発と文化の再編の問題に関して、「国境を超えた開発」と「タイ

民主化」の2つの側面から概観した。ナーン県は、チェンマイ、チェンラーイほど開発が進展しておらず、また、隣接するラオス側も未開発な現状にあって、「伝統的生活様式」「自然」をむしろ前面に出した地域作りに向かっていった。この条件によって、ナーン県は、共同体文化志向の開発のモデルとなり得、国境を超えた開発も、遺跡と共に伝統的生活をも含めた世界遺産への登録計画、エコ・ツアーといった戦略をとることとなった。地域文化の見なおしは、こうした文脈で行われているのである。

1. ナーン県ターワンパー郡パーカー区における開発と文化

以上、県全体の開発と文化の再編の概況である。これを踏まえ、次に、筆者が1990年以來、調査を継続してきた地域であるターワンパー郡パーカー区の事例をみてみたい。同地区は、県内における民主化の時代の農村開発のモデル地区の一つである。パーカー区における開発と文化の再編の事例を通して、モデルになる地区の特色やモデルとなる条件について考えてみたい。

1. ターワンパー郡パーカー区における開発の概況

パーカー区は、ターワンパー盆地の一角を占めており、区内にある7つの村落は、主として水稻耕作によって生計を立てている。この地域は、ナーン川が上流の台地部から盆地に流れこんだあたりの、肥沃で比較的経済的に豊かな地域である。

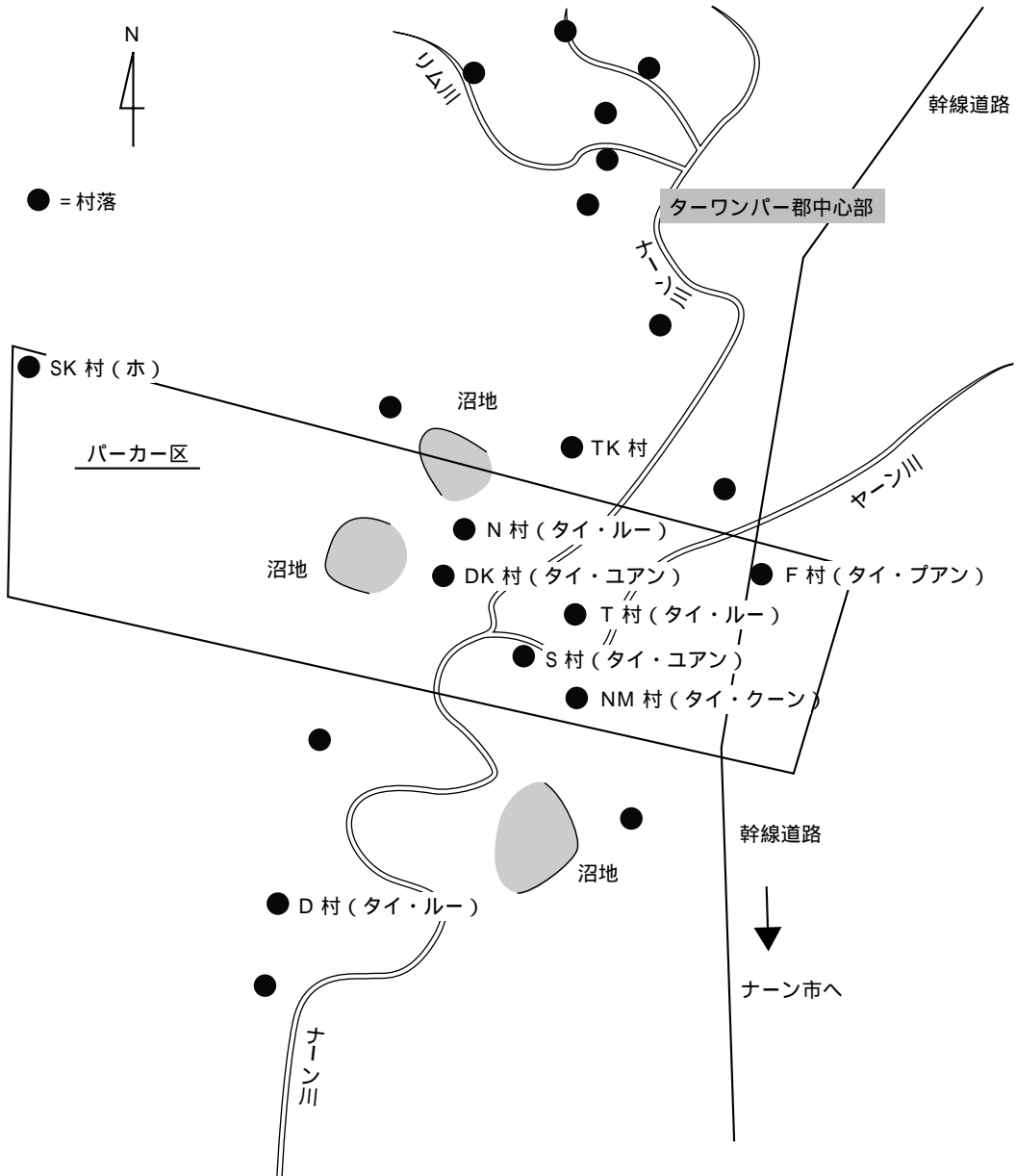
これらの村の住民は、山地民とタイ系民族の混血でホ（混じりあったものの意）と呼ばれる人々からなるSK村の他は、タイ系住民

からなる。パーカー区における7か村のうちとりわけ5か村（DK, T, N, F, NM）は、地域開発に関して目立った活動を行っている。DK村は、魚類保護区を県で最初に作るなど環境保護活動で知られ、T村は、区保健所の所在地でもあり、区における医療の中心地である。また、T寺と住職は、郡の寺院・僧侶を統べる立場で、見習い僧の中等教育も行っている。N村では、1979年から1998年まで村長を務めた人物が、パーカー区の区長を勤めた。この期間、N村は、村落開発コンテスト（後述）全国一に輝き、近年の地域開発の要となった。また、織物や寺院壁画（重要文化財）などが対外的に有名で観光スポットとなっている。また、T村、N村合同で3年に1度行なわれる守護霊儀礼は、近年、観光客を集めている。F村は、1999年以降、区長を出しており、服作りや、椎茸作りなどの住民組織活動が活発化している。区の文化評議会もここにおかれている。

2. パーカー区における歴史・文化の外部へのアピール

先に述べたように、パーカー区の住民は、SK村の他は、タイ系住民からなる。S村の住民はもともとのナーン住民（タイ・ユアン）であるが、T, Nは中国雲南西双版纳ムアンラーから移住したタイ・ルー、Fはラオス・シェンクワン地方から移住したタイ・ブアン、NMはミャンマー・シャン州ケントウンから移住したタイ・クーンであり、現在のタイ国外から19世紀に移住した人々である（図1参照）。また、DK村の住民も、19世紀にタイ北部チェンセンから移住している。タイ・ルー、タイ・クーン、タイ・ブアンは、前近代存在したタイ系王国シブ

図3 パーカー区



ソーンパンナー王国、ケントゥン王国、ブアン王国（ランサーン王国に従属）の民として知られる。北部タイは、18世紀終わりまで200年にわたるビルマ支配を受けていたが、バンコクの王朝の後押しによって再興

されたチェンマイのランナータイ王国はビルマ勢力を逐ったあと、再開拓のために領域外の人々を入植させた。ランナータイ王国の一翼となっていたナーン王国も、開拓のために様々な人々の入植を行ったのであ

る。このような理由で、パーカー区は、タイ系民族を主としつつ、いくつかの互いに異なると認識する集団によって成り立っているのである。

こうした歴史的背景を基盤にパーカー区では、近年、自らの歴史・文化の外部へのアピールが盛んに行われている。とりわけ1990年以降、儀礼を観光客にアピールしたり、移住を記念するため、もしくは伝統的生活を伝承するための民俗資料館を設けるといった現象がみられる。このような活動を行っているのは、前述の地域開発に関して目立った活動を行う5か村（DK，T，N，F，NM）である。これらの村々は、同地区の外部から移住し、それぞれ異なる文化的特色をもっており、それを農村開発の一環として利用している。

民俗資料館に関しては、DK村には農具等の展示場が（1999年）、T村（1997年）、F村（2000年）、NM村（1996年）には農具が展示された伝統的家屋が建てられている。T村はタイ・ルー様式の、F村はタイ・ブアン様式の、NM村はタイ・クーン様式の家屋とされている。N村には他に先駆けて1984年に移住を記念するタイ・ルー家屋が建てられたが、1992年に保健資料展示室に変わり、2001年、寺院境内にコンクリート製の資料館が設けられた。

民俗資料館がとりわけ1990年代に設立されるようになったのは、前述の様な90年代以降の国家文化委員会による積極的な文化政策の影響がある。毎年、村落開発の成果を競う村落開発コンテストが行なわれ、郡レベル、県レベル、全国レベルそれぞれで競われるが、この開発コンテストにおいて文化保存が評価の対象となったことも、文

化の主張がされ始めた原因と考えることができる。

この地区で目だった文化の主張が最初に行われたのは、1990年のN村における儀礼の例である。同区のN，Tそして隣接区のDの3村住民は、故地を同じくするタイ・ルーであり、1993年まで3年に1度、合同で3か村の守護霊を祀る儀礼を行ってきた。儀礼は1990年以降、観光客を呼び、エンターテインメントの要素が増加するなどの肥大化の道をたどった。これについて、90年代、他の村落の文化の主張が活発になったのである。とりわけ1999年以降のタイ・ブアンを住民とするF村のブアン文化主張は目をみはるものがある。これは、パーカー区の区長が1999年以降F村から選出されていることと関係すると思われるが、この点については、本章4節で述べたい。

N村の村人は、1990年、故地シブソーンパンナーを訪れ、以後、シブソーンパンナーの要人もN村を訪れている。また、F村の所属するタイ・ブアンの全国組織タイ・ブアン協会は、現在、故地シェンクワーンの寺院復興に資金援助をしているという。このように、自らの出身地域との連携を図る動きもみられる。

パーカー区の住民は、メコン中流域に分布するタイ系諸民族からなる。彼らが故地から移住したのは、国境確定以前の状況下であるが、その後、国境の確定により彼らの故地は4か国に分断され、冷戦終結後の国境開放政策のもと、故地とのつながりをも模索するようになったのである。この地域には、こうした歴史が凝縮されている。このようなマルチエスニックな状況をもとにした文化の主張は、更に次節で述べるよ

うな、地域文化に目を向けさせる文化政策や教育政策によって拍車がかかっていったのである。

3. パーカー区における文化政策と文化のスタンダード化

前述のように、ナーン県では、県・郡文化評議会の主導により、文化保存が試みられている。この点に関して検討してみたい。

「文化を保護し、民衆にも興味をもたせるということは政府の方針でもあり、それによって民衆は自信をつけることができる」とN村在住のターワンパー郡文化評議会委員長は述べている。また郡文化評議会規定の前文には、「文化は共同体の生活方法や考え方である。すべての地方の共同体の成員は自身の文化の主である。これは古い昔から現在まで継承されてきた社会への遺産である。」と記されている(Saphawat-anatham Thawanpha 1998)。この点は共同体文化論を唱えるチャティップ氏らの意見と合致するものでもあり、共同体文化論の文化政策への反映をうかがわせる。

また、各村落住民、特に教員は、自村の歴史の掘り起こしに関心を持ち始めている。これは、1999年に出された教育に関する法律で、2002年から施行される教育改革において村落史・地域史を重視するという方針がだされたことと関係がある。

これらは、公的に進められている文化保存の政策であるが、前節でみたような各村落での民俗資料館設立の動きは、村落での自主的な動きである。その背景には、「子どもが農具をはじめとする伝統的器具をみても使い方がわからない」と多くの住民が感じるような顕著な生活様式の変化があり、

保存・展示の必要性が叫ばれたという事情も存在している。

ターワンパー郡文化評議会では、例えば、葬式のやり方など伝統的儀礼や伝統的慣習が各村で異なったやり方になっているので、「正しい」方法の復興が試みられているといい、その際、「知恵の保持者」である老人の知識を参照にするという。しかしながら、多くの村人は、「昔から葬式のやり方などは村ごとに相違があった」というようなことを語っている¹⁾。ここには、文化政策を掲げる公と民衆との間の意識のちがいがあ

る。確かに、文化評議会のいうように、近年の生活の変化により、儀礼の方法が忘れられたり曖昧になっている部分もあるであろうが、かつては、おおむね家族・村落内の生活の中で老人から若者への自然な文化の継承が行なわれていた。その結果、村ごとに微妙な相違が生じたとしても、それはむしろ当然のことであったと考えられる。この点からいえば、郡文化評議会のいう「文化の正しいあり方」の指導は、いわば政策による文化のスタンダード化という側面がある。「老人の知恵を参照」というのが、それは老人一般ではなく、伝統的知識が豊富とみなされる特定の人物が対象である。「民衆の知恵」は「共同体文化」のキーワードであるが、共同体文化論の影響を受けた文化政策において、「民衆の知恵」は政策的に選択されるのである。

先に、「高齢者クラブ」(「チョムロム・プー・スーン・アーユ」)が、文化の伝承の役割をも担うとされる点についてふれた。しかしながら、ここには次の様な問題がある。「プー・スーン・アーユ(高齢者)」という語は、新たに作られた60歳以上を指す官製

用語であり、医療費無料などのサービスを受ける対象でもある。一方、日常的には古くから、「コン・タオ・コン・ケー（老人）」という言葉が用いられてきたが、これは、「知恵の保持者」というニュアンスをも持っている。このことは、生活様式の変化に伴って古くからの知恵が有用なものでなくなり、知恵の保持者「コン・タオ・コン・ケー」にかわって、援助の対象としての「プー・スーン・アーユ」というカテゴリーが現われたことを意味するようにも思える。

しかしながら、こうした新たなカテゴリーに再編された人々は、単なる援助の対象としてのみならず、新たなカテゴリーのもとで役割が与えられていると考えられる例もある。

パーカー区のN、T村と隣接区のD村が合同で行ってきたタイ・ルーの儀礼の例をみてみたい。

この儀礼は、1996年、N、T 2村とD村は別々に儀礼を行うようになった。儀礼場を提供するN村の村おこしの要素を帯び、N村と、N村とともに儀礼で重要な役割を果たしたD村との間に儀礼をめぐる考えに相違が生じたからである。従来、儀礼では、カプ・ルー（タイ・ルー民俗歌謡）がN村の歌い手とD村の歌い手によって掛け合いで歌われ、また3か村の守護霊チャオルアン・ムアンラーの呼び出しもなされてきた。しかしながら、2か所への分裂の結果、掛け合い歌もなされなくなり、更に歌い手が死亡し後継者もなく、カプ・ルーは現在、ほとんど消滅した。1999年の儀礼では、チョムロム・ドントリー・プムアン・プー・スーン・アーユ（「高齢者伝統音楽グループ」）が儀礼に登場し、N村のグループは、カプ・

ルーではなく、北タイ全般で歌われるソー（北タイ民俗歌謡）に乗せて、主神に捧げる歌を歌ったのである。T村のグループもまた儀礼で演奏を行った。

この「高齢者伝統音楽クラブ」は近年新たに組織されたもので、パーカー区においては、DK、T、N、Fの4か村がそれぞれ独自のグループを持っている。この高齢者伝統音楽グループは、出家の儀式、結婚式などの儀礼において活動を行うなど、高齢者に社会における役割を与える働きをしている。こうした活動は、高齢者の健康の増進にもよいということで、厚生省も奨励している。ちなみにT村の高齢者伝統音楽クラブでは、厚生省の援助で作ったユニフォームを着用している¹²⁾。

表1に示したように、「高齢者伝統音楽クラブ」の楽器編成、レパートリーは、各民族の伝統を示すものでなく、北タイ全体に共通するものが中心である。もっといえば、必ずしも北タイのものでなく、田舎の情景・心情を歌う流行歌ルーク・トゥンなど全国民によく知られたものもある。楽器も、ラナート（木琴）など必ずしも北タイ独特のものでないものも含まれている。即ち、このあり方は、純粹に古くからの文化を伝承する、というよりも、「プー・スーン・アーユ（高齢者）」という新たなカテゴリーに位置づけされた人々が獲得した新たな役割として再編されたあり方なのである。それは必ずしもスタンダード化ではない。

更に、クラブとして、若者へ伝承を行う動きも現れている。ナーン市内では、週に3度、小中学生を集めて音楽の練習をしており、DK村でもこうした活動が始められつつある。こうした自主的な動きもまた、厚生

表1 高齢者伝統音楽クラブの楽器・レパートリー種別(2000年3月調査)

I村

楽器 弦楽器(スン3サロー3) 管楽器(クイ[縦笛]1)
打楽器(コーン1、チン1、クラトプマイ1) 全て北タイで使用
レパートリー 北タイ伝統音楽26、中部タイもしくは国民的音楽5

DK村

楽器 弦楽器(スン3、サロー2) 管楽器(クイ[縦笛]1)
打楽器(コーン1、チン1) 鍵盤楽器(ラナート[木琴]1)
ラナートはタイ全土で使用される
レパートリー 北タイ伝統音楽5、ルークトウン2、中部タイもしくは国民的音楽6

F村

楽器 弦楽器(スン4、サロー2) 管楽器(クイ[縦笛]1)
打楽器(コーン1、クム・クルアン1)
レパートリー 北タイ伝統音楽9

N村

楽器 弦楽器(スン4、サロー2) 管楽器(クイ[縦笛]1)
打楽器(コーン1、チン1)
レパートリー 北タイ伝統音楽14、ルークトウン1

省の奨励するところとなる。健全な若者の育成にも役立つということで、1990年代半ばより、若者に覚醒剤が広がったこともあり、芸術やスポーツを奨励しているからである。

しかしまた、こうした組織的な動きとは別に、自然な伝承のあり方が新たにあらわれるような例もある。例えば、N村では、クラブのリーダーの近所に住む子どもが興味を示して楽器を習い始めたのをきっかけに、自然と子ども達が集まり、週に数日、このリーダーの家で練習が行われている。

これらの動きには、新たにカテゴライズされた「高齢者」に新たに役割をもたせることと、そうした中で自主的な活動とのせめぎあいが見られる。

4. 開発をめぐる人的ネットワークとパーカー区の指導者

以上のパーカー区における開発と文化の再編の特色を考えるために、パーカー区をとりまく、住民組織をはじめとする開発の人的ネットワークをとりあげてみたい。前章で述べたように、ナーン県では、住民組織のネットワーク化がすすんでいるが、これは、郡レベルでも進められている。

1990年代には、ターワンパー郡にいくつかの地域開発のための組織ができた。住民組織ネットワーク「チョムロム・ハック・バーン」、郡文化評議会、郡高齢者クラブ連合会である。以下、その概要である。

(1) チョムロム・ハック・バーン - 1994年設立。諸村落における環境保護、村落の

収益のための特産品作り、文化保存などの住民組織のネットワーク。事務局はDK村に存在する。リーダーはDK村の住民で県会議員を経験している。

(2) 郡文化評議会 - 1998年設立。国家文化委員会のもとにある県文化評議会の管轄下にある。環境保護、伝統文化保存、雇用促進などを目的としている。会の活動は、伝統文化と調和した社会を作ることを目指しておこなわれる。

(3) 高齢者クラブ郡連合会 - 1992年設立。国家高齢者評議会の県支部の管轄下にある。健康維持、奉仕活動、文化の伝承などを行う。

これらの組織は、県全体の官・民・企業など様々な分野のネットワークである「プラチャーコム・ナン」とのネットワークを持つ。

前述のように、DK村は、県で初めて魚類保護区を設けた村として知られるが、その中心人物は、現在、チョムロム・ハック・バーンの副リーダーを勤めている。そして同時にナン市にあるNGOクルム・ハック・ムアンナンの会計も兼ね、環境保護活動の面で名高い。また、パーカー区高齢者クラブの会長であり、ターワンパー郡高齢者クラブ会長をも兼ねている。美化運動や太極拳などの健康作りや薬草サウナの奨励、竹細工など高齢者クラブの活動に熱心なことで知られる。このように有能とされる指導者は他の局面でも重要な役割を果たしているのである。図4は、ターワンパー郡の開発をめぐる人的ネットワークであるが、その中心人物は、パーカー区に集中している。また、郡文化評議会の重要人物もパーカー区の住人である。パーカー区には

地域開発に関する有能な人材が揃っているのである。1994年、区が地方自治体となり、予算の立案執行が可能になって以降、更に他区との相違が際立つようになったと考えられる。パーカー区が、民主化的な開発のモデル地区となりうるのは、たまたまこうした人的資源にめぐまれたことにもよっている。

こうした人的資源のネットワークを中心とした開発は、民主化の時代の開発の基礎を成すものであろうが、その持続性はキーパーソンに左右される傾向があり、地域における文化の再編のあり方も変化しやすいという性格を併せ持つ。

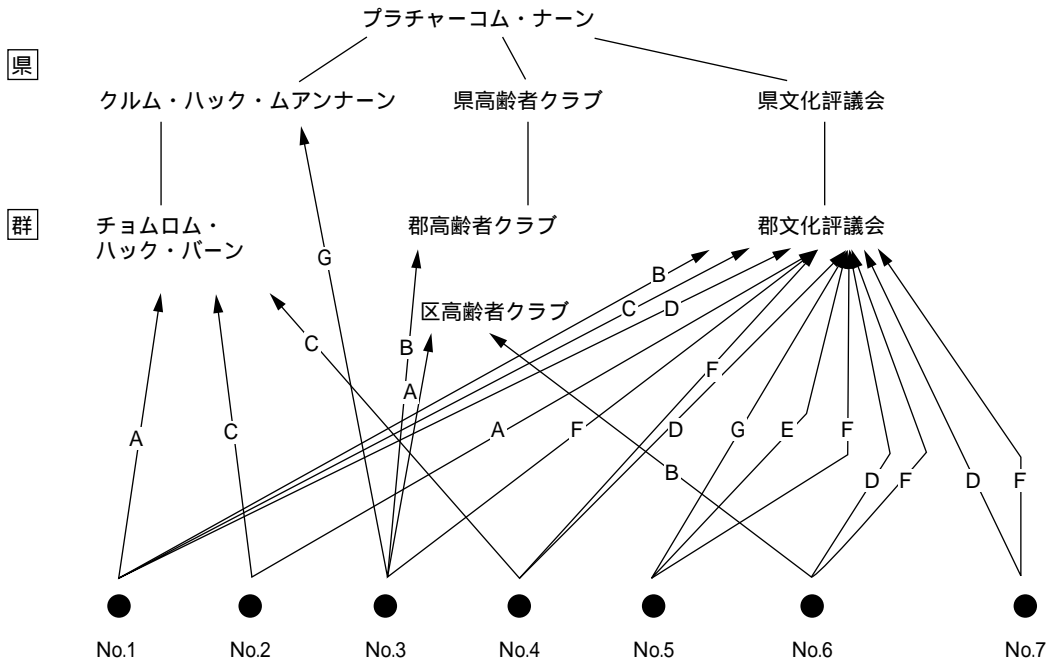
例えば次の様な事例はそのことを反映している。

N村(タイ・ルー)は1979年以降、1998年まで、開発コンテストで全国一に輝いた有能な村長が区長を兼ね、この地域の開発の要であった。タイ・ルーの民族文化の主張はこの時代に行なわれてきた。織物の村として名をあげ、重要文化財の壁画を王女が視察し、儀礼の観光化がなされた。1999年に、区長の定年により、タイ・ブアンのF村の村長が区長となり、以後、タイ・ブアンの文化が大きくアピールされるようになる。また、1999年に区文化評議会を設立し、F村に事務局を置いて、F村住民がリーダーとなっている。区レベルに文化評議会を設けたのは、全県で初めてであり、以後、隣接区にも、文化評議会が設立された。F村にはまた、村レベルでの文化評議会がおかれ、タイ・ブアン文化の保存に努めている。

N村では現在、N村の高齢者伝統音楽クラブのリーダーを勤める、1978年まで村長を勤めた人物が文化活動の要として浮上して

北タイ、ナーン県における開発と文化の再編

図4 開発をめぐる組織のネットワーク（1999年3月調査時点）



(注) 地位 A：リーダー B：副リーダー C：役員 D：小委員会委員長
E：小委員会書記 F：小委員会メンバー G：会計

二つ以上、要職を兼ねている者を下記の出所から選択

パーカー区居住者 DK村 No.1, No.3 N村 No.2, No.5 F村 No.6

(No.4は、パーカー区に隣接のTK村に在住)

(出所) チョムロム・ハックバーンに関しては、国家文化委員会予算請求書1998を、郡文化評議会に関しては郡文化評議会小委員会設立計画書1999を参照。高齢者クラブに関してはインタビューによる。その他インタビューにより補足。

いる。氏は、2002年になってより、毎晩、数人の老人とともに、サローとピン（共に弦楽器）を奏でながら村の中を歩くという活動をしている。氏の若い頃、未婚の青年が楽器を奏でて娘訪ねをする慣習があったといい、その再現を試みているのだという。

このように、重要な人物の変遷によって文化の再編の様相も変化するのである。

先にあげた例（図4）では、郡レベルの3つの組織が連携し、更に県レベルの組織

と連携しているという図式になっている。しかしながら、注目すべきなのは、1人が様々な組織の役職を兼務していることである。同様にネットワークのキーパーソンに注目するオラタイとクソンもこの点にふれてはいるが、「1人が様々な組織の役職を兼務することがみられるが、それぞれの役割をきちんと果たしていれば、組織はうまくいく」(Orathai&Kusol 1998：35-36)と述べており、その持続性がキーパーソンの存在

に左右される点には注目していない。また北原は、「民衆の知恵」が「共同体文化」のキーワードとされつつも、特定個人のリーダー的・模範的能力が強調されがちで、現実にはヒエラルヒー的關係が存在する可能性があると述べている（北原 1996：124）。ただこの場合も、その持続性の弱さには言及していない。1人が様々な組織の役職を兼務することは、組織の連携のあり方自体の問題を示唆している。即ち、独立した組織が相互に連携しあうという意味でのネットワークではなく、たまたま、有能な人材が元来持っていたネットワークを利用して組織が作られ、結果的に、複数の組織が結びつけられているようにみえるのではないかという可能性である。この点は、民主的な開発の基礎とされる人的資源ネットワークのメリットとデメリットを考える上でも重要な点であり、また、タイ社会における人間関係のあり方と関わる問題として検討する必要がある。

また、ここで検討したパーカー区の事例では、ネットワークのキーパーソンは、多くが村落在住であるが、同時に多くが教員もしくは村長経験者であり、そのような意味では、政府と民衆をつなぐ位置にある者である。たとえ郡文化評議会での文化のスタンダード化と思われるような政策が行なわれたとしても、チョムロム・ハックバーンを中心としてネットワークを結ぶ住民組織や、高齢者クラブでの文化活動（前節でとりあげた「高齢者伝統音楽クラブ」にみるような）は、多くが住民の主体性に委ねられる。自由な発想に「お墨付き」をつける形での文化の再編が行なわれるのは、あるいは政府と民衆をつなぐ位置にあるキーパ

ーソンが様々な組織の役職を兼務していることと関係するかもしれない。

・おわりに

メコン中流域は、冷戦終結後、それまで社会主義陣営と自由主義陣営とに別れて対立していたタイ、ミャンマー、ラオス、中国4か国の協力体制が敷かれ、にわかに開発へ動き始めた。タイでは、それと連動する形で地域作りが行なわれるようになった。また、同時に、高度経済成長を経て社会変化の著しい地域社会を、伝統文化の見直しによって地域アイデンティティーを築き、地域作りを行うという方向が出された。

本稿で扱ったナーン県は、ラオス、中国雲南と結びつきを強める地域であると同時に、タイ国内でも民主化のモデル地域と考えられている。ナーン県の場合は、チェンマイ、チェンラーイほど開発が進展しておらず、「伝統的生活様式」「自然」を前面に出した地域作りへと向かった。民主化のモデル地域となったのはこうした条件によるものと思われる。

本稿では、特にターワンパー郡パーカー区を取り上げてこの2つの側面を考察した。パーカー区が民主化時代の開発においてモデル地区になり得た要因は次の2点である。

- 1) パーカー区は、メコン中流域の様々な地域から移住した様々なタイ系民族からなる地域であり、地域文化の見直しへの流れの中、文化のアピールにおいてマルチエスニックな状況を利用できる。
- 2) ターワンパー郡における様々な開発に関わる組織の指導者たちが、パーカー区に集中している。

これらの点は、従来、国内の民主化のモ

北タイ、ナーン県における開発と文化の再編

デルケースとして研究されてきたナーン
の地域開発の問題も、国境を越えた動きを
含めて考察する必要性を示している。

メコン中流域には、前近代に、近似した
文化をもつタイ系諸王国が存在し、戦乱な
どによる人の移動があった。植民地化、国
民国家の成立による4か国への分断、冷戦
時の国境の閉鎖、冷戦後の国境の開放の動
きを経て、国境を越えた交流が始まってい
る。パーカー区のマルチエスニックな状況、
それをもとにした歴史・文化の主張はこう
した歴史的経験の産物である。歴史的な視
野のもとに国境を越えて地域を理解する必
要性がここにある。

また、パーカー区は民主的な開発のモデ
ル地区とされる地域の一つである。しかし
ながら、1人が様々な組織の役職を兼務す
る特色をもつ人的資源のネットワークを中
心とした開発は、その持続性がキーパーソ
ンの存在に左右される性格をもっている。地
域文化の再編のあり方にも、この点が反映
されている。民主的な開発の基礎とされる
人的資源ネットワークのメリットとデメリ
ットを考える上でも重要な点である¹³⁾。

注

- 1) タイの地方行政制度は、上位から順にチャンワット(県) - アンパー(郡) - タンボン(区) - パーン(村)となっている。
- 2) ここでいう「文化の再編」とは、社会の変化に伴って伝統文化が失われたという認識のもとに「文化の復興」を唱え、それに基づいて地域作りを行う場合を想定している。
- 3) プリーダ他(2001)は、クルム・ハック・ムアンナーン
の環境保護活動を紹介している。
- 4) 例えば、Prachakhom Nan(1997)、Orathai&Kusol

- (1998)、プリーダ他(2001)、尾中(2001)。
- 5) 飯島は「タム文字写本文化圏」と名づけている(飯島1998:110-113)。
- 6) 2002年2月、ラオス文化研究所の許可のもと、サイニャブリー県のこれらの郡のタイ・ルーの調査を行った。その際の見聞に基づく。
- 7) ラオス政府は、周辺諸国のうち経済力が高く文化的にも近い関係にあるタイに対しては、国民への影響力を考慮して警戒しつつ交流している向きがある。
- 8) 平地のタイ系民族は86%、山地に住む民族は13%である(Prachakhom Nan 1997:9-10)。
- 9) 2000年8月及び2001年8月、ブラチャーコム・ナーン事務局にてインタビュー。
- 10) ちなみに、2001年、タクシン首相は、大分県の一村一品運動に習い、「1タンボン(区)1産品運動」を始めた。ナーン県においても2001年8月、この政策に基づいた物産展が開かれ、県内の各地域の特産品が持ちよられた。特産品作りによる地域作りへと動き始めている。この動きは、地域アイデンティティーの摸索の動きでもあり、また同時に、村人の生活に根ざした経済基盤づくりをもめざすものである。これはまた同時に1997年の経済危機以降の地域作りのあり方と考えることもできる。
- 11) 1998年8月、郡文化評議会でのインタビュー。
- 12) かつては、好きな者が楽器を持ちより演奏する形であった。現在、バンド編成をとっているが、こうした伝統音楽衰退後の文化復興としての形である。
- 13) 北ラオスとの関わりが強くなった場合のネットワークのあり方も今後問題となるであろう。ラオス国境近くトゥンチャー郡では、ラオス側のタイ・ルーに織物を織らせ買い取り販売するタイ・ルーの村がある。この村の織物とルーのアイデンティティーに関しては(yoshikawa 1999)参照。

文献

- 馬場 雄司 1995. 「北タイ、タイ・ルー族の守護霊
儀礼とその社会的背景 - 移住の記憶をめぐって - 」
『宗教・民族・伝統 - イデオロギー論的考察』(杉
本良男編). 南山大学人類学研究所叢書 : 83-115 .
- 馬場 雄司 1998a. 「タイ・ルーであろうとすこと、
タイ・ルーでなくなること - 越境の時代の守護
霊祭祀 - 」『東南アジア研究』35(4). 京都大学
東南アジア研究センター : 110-131 .
- 馬場 雄司 1998b. 「北タイ、ナーン県における住
民組織のネットワーク化と文化の再編 - 『福祉』
の人類学への覚書 - 」『三重県立看護大学紀要』
2 : 27-33 .
- 馬場 雄司 1999. 「北タイ、タイ・ルーの移住と守
護霊祭祀 - ムアンの解体と『村落』の生成」『土地
所有の政治史』(杉島敬志編). 風響社 : 229-250 .
- 馬場 雄司 2001. 「北タイ、タイ・ルー社会におけ
る『歴史』の生成 地域・『歴史』・福祉」『名
古屋大学東洋史研究報告』25 : 404-420 .
- Baba, Y. 1999. *Making a Network of Community
Groups and Cultural Reformation*, Paper present-
ed in the 7th Conference on Thai Studies, Amster-
dam.
- チャティップ・ナートスパー . 1992. 「タイにおける
共同体文化論の潮流」『国立民族学博物館研究報告』
17(3) : 523-558 .
- 橋本 卓 . 1999a. 「タイにおける地方制度改革の動
向と課題 (一)」『同志社法学』50(4) : 1-38 .
- 橋本 卓 . 1999b. 「タイにおける地方制度改革の動
向と課題 (二・完)」『同志社法学』50(5) : 74-143 .
- Hokankha Cangwat Nan. 1995. *Samnao Bantuk Lon-
nam Kanprachum Triphakhi Khrang Thi 1,2 lae 3*
(「三地域間協力に関する会議 - 第1回、第2回、
第3回における調印記録 [写し]」)
- 飯島明子 「ランナーの歴史と文献に関するノー
ト - チェンマイの誕生をめぐって - 」『黄金の四角
地帯』(新谷忠彦編) : 104-151 .
- 笠井俊之 (編) 『メコン開発をめぐる動き』アジ研ト
ピックリポート1997.4. アジア経済研究所 .
- 北原 淳 . 1996. 『共同体の思想』. 社会思想社 .
- M・R・チャカロット・チッタラポン (上田玲子訳).
1999. 「二十世紀及び今後のタイ文化の表現」田村
克巳編 『文化の生産』(二十世紀における 諸民族
文化の伝統と変容 4) ドメス出版 : 87-97 .
- 尾中文哉 . 2001. 「『もうひとつの発展』と進学の変
容 - 北タイ・ナーン県H村の事例」『日本女子大学
紀要』人間社会学部11 : 1-14
- Orathai&Kusol. 1998. *Cangwat Nan: Bon Senthang
su Kansang Prachasangkhom khong Thai (Nan
Province: On Its Path Towards Civil Society in
Thailand)* Mahidol University.
- Prachakhom Nan. 1997. *Raigan Kanwicai Ruang
Phatanakan Botbat lae Sakayaphap khong
Klum/Ongkon Prachakhom nai Canwat Nan
(The Study on Development, Role and Potential
of Civic Groups and Organizations in Nan
Province)*
- Prawet. 1991. Kansangsan Phumi Phanya Thai
phua Kanphatthana. *Kansamma Wichakan
Phumi Phanya Chaoban*, Krunthep: SKWC. (「開
発のためのタイの知恵の創造」)
- ブリーダ・ルアンヴィジャトーン、ピボップ・ウド
ミッティポン (野田真里訳). 2001. 「タイにおけ
る仏教と自然保護」『仏教・開発・NGO』(西川
潤・野田真里編) 新評論 : 267-284 .
- Samakhom Phusung Ayu Nan. 1998. *Kicakam
Sakha Samakhom Sapha Phusung Ayu Haeng
Prathet Thai Pracam Canwat Nan.* (「国家高齢者
協議会ナーン支部活動報告」)
- Saphawatanatham Thawanpha 1998. *Thamanun
Sapha Watanatham Amphoe Thawanpha Canwat*

北タイ、ナーン県における開発と文化の再編

Nan. (「ナーン県ターワンパー郡文化評議会規則」)

Yoshikawa.H. *A Lue Weaving Village: Identity and Economy of Weaving.* Paper presented in the 7th Conference on Thai Studies, Amsterdam.